

ミカンキイロアザミウマの防除

農薬研究部



◎花き、果菜、果樹での加害とウイルス病伝播

ミカンキイロアザミウマは、日本では1990年に千葉県で初めて発生が確認された侵入害虫である（早瀬・福田、1991）。その後急速に発生地域を拡大し、現在では44都道府県で発生が確認されている。

寄主範囲は広く、花き、果菜類、果樹での被害が拡大している。

成・幼虫の加害および産卵による被害は、果実、花卉、葉のかすり状の食痕、果実の白ふくれや着色異常などであるが、現在、本種が媒介するTSWV（トマト黄化えそウイルス）が大きな問題となっている。

◎防除法の組み合わせで総合防除

【化学的防除——5～7日間隔で散布】

本種は海外からの侵入害虫であり、侵入した時点で、すでに各種薬剤に抵抗性を発達させていたものと考えられている（片山、1997）。そのため、薬剤感受性が低く、有効薬剤が少ないので、登録薬剤もかぎられている（表-1）。

図-1に全農農薬研究部でおこなった各

種薬剤のミカンキイロアザミウマ1令幼虫に対する試験の結果を示した。

その結果、コテツフロアブル、アーデント水和剤、トクチオン乳剤、マラソン乳剤が高い効果を示した。しかし、ミナミキイロアザミウマに卓効を示すベストガード水溶剤、モスピラン水溶剤の効果は低かった。

また、現在開発中の薬剤では、マクロライド系化合物のアファーム乳剤、スピノエース顆粒水和剤が高い効果を示した。

本種の成虫は花に集中して寄生し、植物組織中に産卵する上、蛹は土中に生存するため、直接薬剤が届きにくい。さらに、効果の高い薬剤が少ないことなどから、5～7日間隔で十分の薬量をていねいに散布することが大切である。

また、粒剤の施用も、幼虫の密度を抑制する観点から有効である。

【生物的防除——天敵利用】

ヨーロッパでは、本種の防除においてハナカメムシ類、カブリダニ類が天敵農薬としてすでに実用化されており、日本でも実用化に向け開発中である。

天敵を生物農薬として利用しなくても、実際の圃場ではハナカメムシ類など数種の

天敵が活動し、害虫の密度をある程度おさえている。

天敵に対し影響の強い農薬は、散布により、かえって防除を困難にする場合があるので、できるだけ影響の少ない薬剤を選んで防除することが課題となる。

【耕種的・物理的防除——防虫ネット利用・除草】

本種の侵入を防ぐため、施設の開口部に1mm以下の侵入防止ネットを設置することが有効である。

雑草が本圃での発生源となっている場合が多いので、圃場周辺の雑草防除が大切である。

★

最後に、ミカンキイロアザミウマは難防除害虫であり、防除が非常に困難である。化学的防除、生物的防除、耕種的・物理的防除をうまく組み合わせ、本種の寄生を上手にコントロールしていく必要がある。

全農農薬研究部では、引きつづきミカンキイロアザミウマに有効な薬剤を検索するとともに、総合防除の観点から天敵に影響の少ない薬剤の検索にも取り組んでいる。

表-1 ミカンキイロアザミウマ作物別登録農薬一覧表（平成9年8月19日現在）

作物	登録農薬
イチゴ	アーデント水和剤、ジェットVP、マラソン乳剤 家庭園芸用マラソン乳剤
カンキツ	オリオン水和剤40、オルトラン水和剤、スミロディー乳剤、 ベストガード水溶剤、モスピラン水溶剤、 家庭園芸用オルトラン水和剤
ガーベラ	エンセダン乳剤、オルトラン水和剤、カスケード乳剤、 トクチオン乳剤、パダンSG水溶剤、モスピラン水溶剤 オルトラン粒剤
キク	アーデント水和剤、エンセダン乳剤、オルトラン水和剤、 カスケード乳剤、コテツフロアブル、トクチオン乳剤、 家庭園芸用オルトラン水和剤、オンコル粒剤5
キュウリ	アーデント水和剤、マラバッサ乳剤、オンコル粒剤5
シクラメン	エビセクト水和剤、パダンSG水溶剤、パダン水溶剤
ナス	アーデント水和剤、マラバッサ乳剤
バラ	オルトラン水和剤、カスケード乳剤、モスピラン水溶剤、 家庭園芸用オルトラン水和剤
ピーマン	アーデント水和剤、モスピラン水溶剤
ミカン	DDVP乳剤75、アーデント水和剤、デス75、 ホスピット乳剤75、ラビック75乳剤
モモ	アーデント水和剤

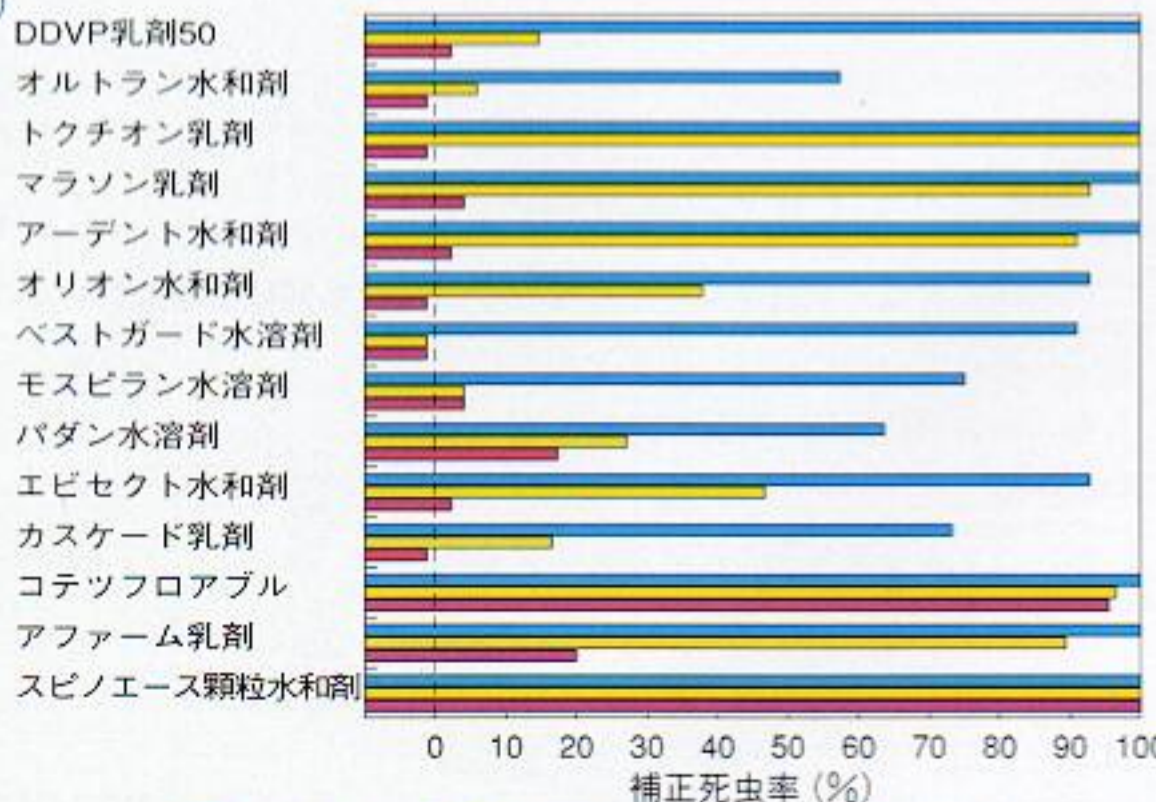


図-1 各薬剤のミカンキイロアザミウマ1令幼虫に対する活性